The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Poetics and Politics of "Houses" in Toni Morrison's Novels
Author(s)	山野, 茂
Citation	大阪大学, 2014, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/34539
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　山野　茂　）	
論文題名	Poetics and Politics of “Houses” in Toni Morrison’s Novels （トニ・モリスンの小説における「家」の芸術性と政治性）

論文内容の要旨

トニ・モリスンは『青い眼がほしい』以来、「家」を小説における重要な装置として描いてきた。家の所有はアフリカ系アメリカ人（以下「黒人」）にとって貧困からの脱却の象徴であるが、家に重要な役割を与えることは「アメリカの夢」の価値観を問うことにもつながる。モリスンは、家を黒人の生を抑圧する「ハウス」と生をはぐくむ「ホーム」に分けて二元論的に捉えている。本論は、「家」が重要な役割を果たしている八つの作品を「ハウス」の要素が強いものから「ホーム」の要素が強いものへと整理しなおして芸術性・政治性という観点から分析し、黒人が抱えている問題を「ハウス」がどのように映し出しているか、またモリスンが到達した「ホーム」とは何かを明らかにするものである。

『マーシィ』では、未完成の「大邸宅」がアメリカの萌芽期以来「アメリカの夢」が抱えている問題を映し出している。その「大邸宅」に奴隷のフローレンスが釘で文字を刻み込むのは、「アメリカの夢」の内側に入り込みアメリカの重要な文化的価値観を問い直し、アメリカの歴史そのものを書き直す行為である。『ターベイビー』の「十字架館」は、カリブ海で最も美しくまわりの自然と調和しているようであるが、実はアメリカ帝国主義を象徴している。それを暴きだすサンは、白人文化の教育を受け、彼が「ターベイビー」と嘲笑的に呼んだジャディーンの虜になり、黒人文化の象徴である故郷エローを失うことになる。『青い眼がほしい』で描かれるほとんどの家は、黒人の生を抑圧しゆがめる家である。自分の家に不幸と醜さしか見いだせないポーリーンは召使いとして勤める大きくて白い家を自分の家として生きている。黒人中産階級の美しくて大きな家も、家族は互いに阻害関係にあり建物はあっても「ホーム」はないことを示唆している。『ラブ』の「コージーホテル」は、黒人による「アメリカの夢」の実現を象徴しているが、一方で階級差別の象徴でもある。廃墟となったホテルは、白人中産階級の価値観に囚われて愛を育むことができなくなった黒人ホテルオーナーとその家族の悲劇を映し出している。『スーラ』の「巨大な家」は、生存欲求の象徴であるとともに、様々な人を受け入れ、いつでも食事が用意されていて「ホーム」的要素を併せ持っている。しかしながらエヴァの子殺しは、この「巨大な家」が生かし殺す家であることを露わにする。「巨大な家」はエヴァの生存することに対する絶対的価値観と無責任な男に対する憎しみに基づく建築物であり、結局「ホーム」にはなり得なかったのである。『パラダイス』の修道院は、社会の中で落伍者・不適応者と思われる女性たちを受け入れ立ち直らせる役割を果たし、「ホーム」的な要素を帯びている。しかし修道院の女性たちは、黒人純血主義に執着するルビーの町の男たちのスケープゴートとなって殺される。この襲撃は、かつて「ホーム」作りを目指した町が過去に排除されたことに対する遺恨を引きずっていつしか自分達が排除する側になり、結局白人文化の模倣をしていたことを露にしている。『ビラビド』の大きな家「124」は、かつては「ホーム」性があったが、セスの子殺し後地域から孤立し、亡霊に取り憑かれ家族を脅かす「ハウス」へと変わる。閉じられた家はセスに過去と向き合うことを強い、そこでの会話は奴隷制の真実を可視化する。「124」は、セスの子殺しの一要因となった地域の女性たちとの共闘によって亡霊から解放される。このことは黒人が生きていくには対立を超えたコミュニティーとの共闘が必要であることを示唆している。最新小説『ホーム』には家の描写はほとんどない。フランクとシーは、退屈で息苦しい故郷ロータスを出て行くが二人とも地獄のような経験をして帰郷する。町の女性たちはシーが心身ともに回復するのを助け、自己を大切にすることを教え自立を促してくれる。見知らぬ人ではあるが、子を生かすために犠牲にとなったという父親の骨を丁寧に葬ることで生きることの大切さを確認した後、シーがフランクに呼びかける言葉「家に帰ろう」は、地域の人びとへの信頼を表しており、「ホーム」は建物ではなくコミュニティーにあることを示唆している。

モリスンが探究の果てに到達した「ホーム」像は、「ハウス」の描写の比重が高い小説の中でもその一端を覗かせていたコミュニティーそのものである。ありきたりの結論とも思われるが、本論で議論してきた「ハウス」が人の生を抑圧し破壊をもたらすことを考えれば、その結論は深遠な意味を持っており、資本主義社会における個人の所有と個人の成功を強調する白人中産階級の価値観の問い直しを求めていると言える。

様式7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　山野茂　）			
	（職）		氏　名
論文審査担当者	主 査	言語文化研究科　教授	渡邉　克昭
	副 査	言語文化研究科　教授	貴志　雅之
	副 査	言語文化研究科准教授	里内　克巳
	副 査	言語文化研究科　教授	畑田　美緒
	副 査	言語文化研究科准教授	中村　未樹

論文審査の結果の要旨

本論文“Poetics and Politics of ‘Houses’ in Toni Morrison’s Novels”は、『青い眼がほしい』(1970)の「緑と白の家」以来、家を小説における重要な舞台装置として描いてきたノーベル賞作家トニ・モリスンが、人を生かし、生を育む場としての「ホーム」を模索してきた一方で、作品中に登場する家の多くが黒人に「ホーム」を提供せず、むしろ抑圧的な機能を果たしていることに着目し、彼女の小説における家をめぐる政治性と芸術性を精緻に分析した非常に優れた論考である。これまで家という視座からモリスン文学の特質を俯瞰的に描出しようとした先行研究はほとんどなく、モリスンのエッセイ「ホーム」において提示された理想的な「ホーム」像と、実際に小説で描かれる数々の「ハウス」の間に見られる齟齬を解明すべく、両者の関係を丹念に解きほぐし、彼女の政治性と芸術性の関係を探り当てた本論は、独創性に満ちており、モリスン批評の新たな領域を切り拓いた点において高く評価することができる。

序論においては、アフリカ系アメリカ人にとって家の所有は生存欲求の表象であり、家は黒人の生を描く上で必然的に重要な役割を果たすとともに、家の所有は「アメリカの夢」とも密接な関係があり、家の表象について議論することは必然的に「アメリカの夢」の価値観を問い、政治性を帯びてくることがまず指摘される。モリスンの『暗闇に遊ぶ』(1992)を引き合いに出しつつ、モリスンは「人種問題」を黒人対白人というありきたりの図式で捉えるのではなく、個々の黒人または黒人のコミュニティーの中に浸透し、内在している問題として扱っていること、そして「美しくて、力強い」芸術としての文学の一つの存在意義が政治性にあり、文学は啓発的で、「ドアを開け、道を示すもの」であるという作家の基本的な立場がまず確認される。そのうえで本論では、家が重要な役割を果たしている『青い眼がほしい』(1970)、『スーラ』(1973)、『ターベイビー』(1981)、『ビラヴィド』(1987)、『パラダイス』(1997)、『ラヴ』(2003)、『マーシィ』(2008)、『ホーム』(2012)を研究対象として取り上げる必要性が明示される。その際、必ずしも執筆の年代、もしくは物語の歴史的背景の順に従って通時的に論じるのではなく、上述の作品群を「ハウス」の比重が高い作品から「ホーム」の要素が強くなる作品へと整理し直すことにより、家の表象をめぐって表裏一体をなすモリスンの政治性と芸術性を炙り出すという、ユニークな本論文の構成原理が明確に提示されている。

第一章、「奴隷制言説が刻み込まれた「大邸宅」―『マーシィ』」は、「家」が表象している「アメリカの夢」が抱える諸問題の根源がこの小説に凝縮されているとの立場から、建築途中で廃墟となった「大邸宅」に奴隷フローレンスが文字を釘で刻むという衝撃的な描写で始まる『マーシィ』を取り上げ、移民ジェイコブ・ヴァークの「アメリカの夢」に対する執着の分析を通して、アメリカ資本主義の歴史的発展の基となった奴隷制、先住民殲滅の歴史、家父長的男性中心主義という三つの問題系が前景化される。「大邸宅」は、最終的に火炎に包まれ灰となって時空を超えて飛んでいくが、奴隷制言説が刻み込まれた「アメリカの夢」が新たな「アメリカ創世記」の姿を映し出すとともに、アメリカの支配的価値観の問い直しが迫られるという含蓄に富む結論が導き出される。

第二章、「生を抑圧する家」では、黒人の生のみならず白人の生も抑圧する「ハウス」が描かれているモリスンの三つの小説を議論の俎上に載せ、白人中産階級の文化と価値観を表象する「ハウス」が黒人に及ぼす強力な感染力について、緻密な作品論が展開されている。まず、「精巧に作られたトイレ―『ターベイビー』の「十字架館」」においては、『マーシィ』の「大邸宅」が表象していたアメリカ資本主義の萌芽と発展との連続性が、『ターベイビー』の「十字架館」に見られることを指摘したうえで、美しいこの館が実は破壊的なアメリカ帝国主義を象徴するものであり、館の主人が利己的で人種/階級差別者であることが炙り出される。結末において一目散に「十字架館」に向かうサンの姿に「館」の影響力の強さが見られるという考察は、「ホーム」の実現がいかに困難であるかという点において重要な意義を認めることができる。次に提示される「紛い物の家―『青い眼がほしい』」は、モリスンの第１作が、白人中産階級の価値観に囚われた黒人の生を徹底して批判しており、そこには黒人に現実の生を直視させるための解毒剤的効果が見いだせることが論じられている。紛い物のポーリーンの家と、彼女が働く「大きな白い家」の対比を通して、黒人が家に対して抱く所有欲が、白人中産階級の価値観にいかに染まっているかを的確に描出するとともに、クローディアの貧しい家の家族にモリスンの「ホーム」観が映し出されていることも明らかにしている。三つ目のセクション「ホテルに囚われた愛―『ラヴ』の「コージーホテル」」は、人種差別を利用して成功を収めた黒人ホテル経営者とその家族を焦点化し、白人文化に迎合する刹那的で頽廃性なこの「ハウス」が、家父長的な彼の亡霊にいかに執拗に取りつかれ、黒人女性を翻弄するかを緻密に検証している。

以上、「ハウス」が及ぼす白人文化への共犯関係を論じた三作の考察を踏まえ、第三章、「ホームを内包する家を求めて」においては、モリスンの「ホーム」に対する探求を反映する「大きな家」が描き込まれた『スーラ』と『パラダイス』が議論の対象となっている。まず、「生かし殺す家―『スーラ』の「巨大な家」」では、保険金で建設されたエヴァの「巨大な家」に一見「ホーム」的要素は見られるものの、それが実は人間を生かしもし、殺しもする家であることが明らかになる。増殖し続ける「巨大な家」の根幹にあるのは彼女の「生きる」ことに対する絶対的な価値意識と夫に対する「憎しみ」でしかなく、塞がれた窓は、コミュニティーに対して身を開こうとしない「ハウス」の限界を物語っているという結論は、内包された「ホーム」の実現の困難さを鮮やかに浮き彫りにしており、高く評価できる。それに続く論考、「人を招き入れる家―『パラダイス』の「修道院」」は、公金横領者の元邸宅であり、先住民の同化政策の教育機関に転用された「修道院」が、虐げられた女性の避難所に変わり、ホーム性を帯びるものの、黒人純血神話を奉じるルビーの男達のスケープゴートとなるさまを丹念に分析し、黒人優越主義が白人優越主義の裏返しでしかないことを明らかにしている。「修道院」の女たちは復活するものの、その姿は亡霊性を帯びており、人里離れた孤立した場所での「ホーム」の実現の限界も暗示しているという考察は、「ハウス」と「ホーム」の曖昧な境界の揺らぎを緻密に記述しており、結論へ向けての重要な布石となっている。

第四章、「「語られていない物語」を語る家―『ビラヴィド』の１２４」は、解放奴隷ベイビー・サグズが地下鉄道の駅として借りている大きな家「124」に照準を定め、この家に取り憑いたビラヴィドと、子殺しを行ったセス、娘のデンバー、ポールDとの相克を地域の住民との関係を射程に入れ、綿密に分析した優れた考察である。一時は地域住民が集まるセンターの役割も果たしていた「124」は、奴隷解放後の反動で黒人が虐殺されている現実があるにも関わらず宗教指導者ベイビー・サグズによって開かれる大きなパーティーのせいで、住民の妬みを買う。その後セスは、「124」に閉じこもり、ビラヴィドとデンバーとの生活の中に「ホーム」を見つけようとするものの、奴隷制の残酷な真実を突き付けられ、精神的崩壊寸前まで追い詰められる。だが、デンバーの仲介で、かつては不寛容であったコミュニティーの人たちとの関係を取り戻し、地域の女性と悪魔払いをした後、家は静かな物理的存在に戻る。モリスンの代表作における「124」をめぐるこのような変遷を詳細に辿ることにより、本章は、「ホーム」は孤立した家にあるのではなく黒人コミュニティーの中にあるという、本論の中核をなす主張の裏付けを鮮やかに提示することに成功している。

第五章、「ホームの探求―『ホーム』」は、「ホーム」は特定の家にはなくコミュニティーそのものであるという序文の内容が、いかにこの物語において、具現されているかを検証した重要な論考である。朝鮮戦争での体験によりPTSDに苦しむフランクと、彼の妹で白人優越主義者の医者によって地獄の苦しみを味わったシーが、黒人コミュニティーの人たちの援助によっていかに立ち直っていくかを丹念に辿ったうえで、シーがフランクに結末で呼びかける言葉「家に帰ろう」の「家」とは「ホーム」であり、コミュニティーとしての「ホーム」に対する二人の信頼を表しているという鋭い洞察が導き出される。この小説においてモリスンの「ホーム」像は完成したという前章の結論に基づき、終章では、白人的価値観に染まった物理的な「ハウス」との対比において、「ホーム」は相互扶助的な黒人コミュニティーのなかにこそ見いだされ、それは資本主義社会における個人所有や個人の成功を強調する白人中産階級の文化に対する異議申し立ての戦略に他ならなかったという説得力に富む見解が提示されている。

このように本論文は、分かち難く絡み合った「ハウス」と「ホーム」が織りなす政治性と芸術性が、いかにモリスン文学における重要な準拠枠となっているかを、代表的な八つの小説を丁寧に読み解くことによって実証的に描出し、モリスン批評の新機軸を提示した点において、高い学術的意義を認めることができる。本論文は、着想が斬新で独創性に富んでいるのみならず、序論から結論へと論を導く論証の手続きが手堅く、論述には首尾一貫した問題意識と説得力が備わっている。複雑な様相を呈する「ハウス」と「ホーム」の関係を一つ一つ論点を押さえながら鮮やかに解きほぐし、随所に粘り強い思考の跡を窺わせる本論文は、明快にして平明な英文１８６ページで構成され、博士論文として十分な読み応えがある。

以上の評価を踏まえ、論文審査においては、審査委員から主として以下のよう質疑がなされた。モリスン自身の発言に基づき、「ハウス」と「ホーム」を二項対立として措定し、前者から後者への移行という視点に立ち、やや図式的に論を進めていく傾向が見られるが、両者の間に見られるダイナミックな反転や相互依存性など、両者をめぐるポスト構造主義的な動態をもっと強調してもよかったのではないか。本論はどちらかと言えば共時的な視座より構築されているが、結論部分においてこれまで得られた知見を執筆順、もしくは物語の舞台となる時代設定順に組み換え、通時的視座より統括し直すことにより、さらに踏み込んだ考察を引き出すこともできたのではないかといった点である。これらの指摘に対して、執筆者から、章立ての方法、ならびに章のバランスについてはかなり悩んだが、再考の余地があり、『ソロモンの歌』(1977)、『ジャズ』(1992)など、本論で扱えなかった小説も今後は研究の射程に入れ、指摘された論点をさらなる発表の場において活かしていきたいとの応答がなされた。

質疑において提示された上記の論点は、本論文が高水準に到達していることを踏まえた上での指摘であり、本論文の学術的価値を本質的に損なうものではない。本論文で示された論考は、トニ・モリスン研究のみならずアフリカ系アメリカ文学のアプローチの地平を拡げ、新たな方向性を模索するものとして、日本アメリカ文学会及び黒人研究の会等の全国大会での口頭発表において、高い評価を得てきた。のみならず本論文の一部は、既に６本の論文として査読付きの学会誌に掲載されている。

なお本論文は、審査委員が一致して認めるように、的確でこなれた英文で書かれており、執筆者が優れた英語運用能力の持ち主であることを窺わせる。この点においても、執筆者が、今後アフリカ系アメリカ文学研究者として国際的に研究成果を発信することにより、アメリカ文学・文化研究の発展に大いに寄与することが期待できる。

上記考査に基づき、総合的に判定した結果、本審査委員会は全会一致で、本論文が博士（言語文化学）の学位を授与するのにふさわしい論文であるとの結論に達した。